

健康社会と空間・まちづくりシンポジウム

<プログラム内容報告>

■ 開会挨拶

株式会社竹中工務店 取締役社長 宮下正裕

超高齢社会が進む中で、「健康寿命」をいかに伸ばせるかという課題は、活力あるまちづくりの観点からも重視されている。

昨年のシンポジウムでご教示頂いた、誰もが健康づくりに向けて行動できる環境を整える重要性を説いた「0次予防」の考えは、身体活動・交流を促す公園等のハード面や、サロンのような仕掛けを提供する等のソフト面でのアプローチがある。

この2つのアプローチを融合させながら、暮らせば暮らすほど健康になるまちづくりについて議論していきたい。また、その仕掛けづくりに携わる様々なセクターが連携し、どのようにすればお互いの強みを発揮できるか、という視点からも議論を展開していきたい。



開会挨拶をする宮下社長

■ 基調講演 「健康なまちづくり 人はまちの中に暮らしている」

千葉大学予防医学センター 近藤克則 教授

「健康な市民が多い健康なまち」「不健康な市民が多い不健康なまち」の存在は原因があることが分かっており、「健康なまち」の実現により市民の健康増進へアプローチする必要がある。また「健康なまち」を実現するには、公園づくりなどの「ハード」と市民参加プログラムの設定などの「ソフト」の双方を整備し、かつ市民の健康影響を評価・分析することで「ゼロ次予防」を目指すことが重要である。

ではその実現のために今後何を取り入れていくべきなのか。現在 JAGES 松戸プロジェクトでは「プロボノ」による支援を実行しており、ソフト面整備に効果的である。加えて、産学官といった多様なセクターの連携でお互いの強みを活かしたまちづくり設計を行うこと、かつビッグデータ・AI を大いに活用した評価・分析を行うことで PDCA サイクルを回していくことが求められている。



講演される近藤教授



同左

■ 招待講演 「ソーシャルデザイン：市民の力で地域課題を解決する方法」
NPO 法人 issue+design 代表 笥裕介 氏

issue+design は、2008 年より、様々な社会課題に対し、人々の共感を引き出す「デザイン」というツールを活用することにより、みんなで解決を図ってきた。住民と共にまちの未来を描きながらまちの総合計画を策定・実践した高知県佐川町や、鉄道沿線の活性化を図った岐阜県御嵩町での活動では、プログラムに参加してもらったり、プロジェクトを編み出したりしていくことにより、地域の課題をデザインで解決してきた。

このような活動や交流は、地域に何をもたらすのか。それは、地域住民によるつながり・協働で幸福感が高まり、地域還元への気持ちが生え、その結果、個人の力を超えた高い創造性をもたらすのだと考える。私はこの創造のきっかけづくりを、「ソーシャルデザイン」という形を通して地域にもたらしていきたい。



講演される笥氏



同左

■千葉大学 竹中工務店健康空間・まちづくり寄附研究部門 活動報告

千葉大学予防医学センター 花里真道 准教授

一昨年、本学内に「竹中工務店健康空間・まちづくり寄附研究部門」を設置してから、「健康な建物のエビデンス」をツールとして設計者が活用できる「健康デザインガイドライン」の開発、医学系研究者等とのコミュニケーションなど、様々な活動を行ってきた。また健康の実践として、イオンモール宮崎では、「健康への気づき」を促す空間デザイン・プログラムを実現し、その効果検証を実施している。



活動報告をされる花里准教授

このような活動を通して、人から始まり、人と寄り添う建築・まちづくりを推進し、ひとりひとりが持っている可能性を支援し、誰もが幸せを感じる社会を目指す活動を、実行していきたい。

■パネルディスカッション

「市民・大学・民間セクターの創造性とイノベーション力を活かす

仕組みづくりについて -健康なまちづくりに向けて-

パネリスト 近藤克則 教授 / 寛裕介 氏 / 神谷友里江 氏 / 乾靖 氏

モデレーター 花里真道 准教授

1. パネルディスカッションに先立ち、二名の方からそれぞれショートプレゼンテーションを頂いた。
 - 神谷氏からは、所属されている(株)FiNCのビジョンや健康寿命延伸・健康経営推進・働き方改革推進等の課題解決にむけたミッションについてご紹介頂いた。その後、現在(株)FiNCが取り組んでいる、アプリ・プログラムを通じた事業やイベント事例についてもご紹介頂いた。
 - 乾氏からは、竹中工務店のまちづくり戦略について紹介し、これまで取り組んできた建設事業に加えてサービス事業にも取り組むことにより「まちづくり総合エンジニアリング企業」を目指すことを説明した。また具体事例では、地域の方々の力を借り地域活性化を目指す「聴竹居の活用」「イーストベイ構想」について紹介した。
2. パネルディスカッションでは、はじめに「市民・場・空間が、健康まちづくりについてどのような可能性を持っているのか」というテーマで討議がなされた。「ソーシャルキャピタル

(人々のつながり)」によるメンタル面での効果発揮に関してや、「健康増進を目的としてプログラム・プロジェクトを実行するのではなく、『楽しさ』『幸福感』『達成感』等、継続的に市民に参加してもらえるような空間づくり・仕掛けづくりが大切である」という認識を登壇者で共有した。そのうえで、「上記のような仕掛けづくりを手掛けていくには、市民に対して『1対1の対話』を実行することにより想いを抽出し、その想いをもとにデザインすることが重要である」「プログラムに、継続的に市民に参加してもらうためには、SNSなどのバーチャルなコミュニティだけでなく、リアルな場（空間）でのコミュニティも必要不可欠となってくる」といった意見が出た。

- 次に、市民・大学・民間セクターなど、それぞれの役割を拡張することによる可能性について、というテーマでディスカッションが進んだ。「細分化された地域の課題やマーケットが多々発生しており、企業などの民間セクターだけで解決することに限界が見えてきている。そこで、市民が主役となり自ら力を発揮できる仕掛けを民間セクターにより設計することにより、市民の力と民間セクターの力を掛け合わせることで共創する必要がある」「行政・大学・企業等が単独で解決できない課題が浮き彫りになっているのが現状である。このような問題を解決していくために、目標・ゴールを共有し、お互いの強みを持ち合いながら活動していくことが重要である」といった意見が出た。
- 最後に、これからの健康なまちづくりへの期待や連携の在り方についてコメントを頂いた。



講演される神谷氏



講演される乾氏



パネルディスカッションの様子



発言される寛氏（右）



発言される神谷氏（右）



モデレーターの花里准教授（一番右）

■ 閉会挨拶

千葉大学予防医学センター教授 近藤克則氏

本日のシンポジウムでは、①利用者に対し、いかにしてプログラムを上手くデザイン・アプローチし、市民を誘導することができるかが重要である、②コレクティブインパクトについて、「助きたい」「助けてほしい」という2者だけでなく、その仲介者と活動を応援する者が必要である、という点が印象的であった。

今後も、このようなデザイン・アプローチ方法を実行していきながら、健築の活動を活発化させ推進していきたい。